

スラウエシ周辺海域のサマ・バジャウ人
——人口と村落分布に関する基礎資料——

**The Sama-Bajau in and around Sulawesi: Basic Data on Their Population
and Distribution of the Villages**

長津 一史*
Kazufumi NAGATSU

Abstract

The Sama-Bajau are dispersed over a wide maritime area in Southeast Asia, including the Sulu archipelago of the southern Philippines, the coasts of Sabah in Malaysia, and eastern Indonesia. With an approximate population of 1,100,000, many of the Sama-Bajau live along coasts and on islands, and their livelihood is based on activities such as fishing, cultivation of coconut palms, and marine trade.

Scholars have discussed the population movements of the Sama-Bajau in connection with their historical origins. I find it less significant to seek the “true” original place of the Sama-Bajau from the historical essentialists’ viewpoint, as the Sama-Bajau and the neighboring communities might have constantly converted their ethnic self identification from non-Sama-Bajau into Sama-Bajau, or vice versa. As J. Warren [1981] proved, the Sama-Bajau population has consisted of ethnic groups of varied origins in Sulu Archipelago. Nevertheless, it is still significant to trace the population movement and local networks of the Sama-Dilaut in order to explore the dynamics of the social histories of maritime Southeast Asia. Such local networks created and reorganized as the maritime folks have been embedded as its essential social components in this maritime world.

Research on the origins of the Sama-Bajau first appeared in historical geographer D. E. Sopher’s *The Sea Nomads* [Sopher 1977 (1965)]. Sopher examined the cultural characteristics and geographical distribution of all of the boat-dwelling groups in Southeast Asia, including the Sama-Bajau. He advanced a hypothesis that these boat-dwellers originated in the Riau Lingga archipelago in the seas to the south of the Malay Peninsula. According to this hypothesis, the Sama-Bajau gradually migrated away from Riau Lingga, from the 14th to the 17th centuries, traveling via the western coast of Borneo, and dispersing among the Sulu islands and along the coasts of Sulawesi [Sopher 1977(1965): 345-359].

*東洋大学社会学部 Department of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ nagatsu@toyonet.toyoz.ac.jp

A. K. Pallesen's linguistic study [Pallesen 1985: 245–247] and H. A. Nimmo's ethnography [Nimmo 1968: 42–50] both on the Sama-Bajau in Sulu archipelago, however, disputed Sopher's hypothesis, and suggested that the Sama-Bajau belonged to a language group that was different from those of the other boat dwellers. Further, these studies concluded that the Sama-Bajau originated in the south-western part of Mindanao, the Philippines, and after the 10th century, spread southwards and to the eastern part of Insular Southeast Asia.

Pallesen's and Nimmo's works are based on the then latest data gained through their long-term fieldworks and, therefore, their postulation that posits Mindanao as the Sama-Bajau's original place is seemingly more convincing than the Sopher's assumption. However, their discussions are also insufficient, since their works pay little attention to the Sama-Bajau in Indonesian Archipelago who occupy one third of the total Sama-Bajau population, and apparently lack comparative point of view. We cannot examine the maritime movements of the Sama-Bajau without referring to those of the Sama-Bajau in Indonesian Archipelago.

The purpose of this paper is to list the basic data regarding the distribution of the Sama-Bajau with special reference to those who live in and around Sulawesi for the sake of the future reconstruction of the social history of the Sama-Bajau maritime movements. The data are based on the censuses as of 2000 of the Philippines, Malaysia and Indonesia and my fieldworks conducted from 1995 through 2007. The data in this paper includes 1) maps showing the distribution of the Sama-Bajau in the Philippines, Sabah, Malaysia, and Indonesia, 2) a map showing the classification of the Sama-Bajau according to the cultural proximities and shared historical networks, and 3) maps showing the main Sama-Bajau villages (*desa*) in and around Sulawesi followed by the lists of the village names as well as the Sama-Bajau population.

キーワード: サマ・バジャウ, 移動史, フィリピン, マレーシア, インドネシア, スラウェシ

Key words: Sama-Bajau, History of the Population Movement, the Philippines, Malaysia, Indonesia, Sulawesi

I. はじめに

本稿は、インドネシア・スラウェシ島に住むサマ Sama 人を中心に、サマ人の人口分布に関する基礎的情報を提示するものである。サマ人とは、サマ語を話し、サマを一般的な自称とする人々を指している。居住地は、フィリピン南部スルー諸島からマレーシア・サバ州、インドネシア東部に至る広い海域に及んでいる。各地域のサマ語にはかなりの偏差がみられるが、それらのあいだには音韻、語彙、意味構造、統語法などの面で系統的な近接関係がみ

いだされる [Pallesen 1985: 43]。2000 年の各国のセンサスによれば、サマ人の人口は 110 万人ほどと推計される。もっともまとまって居住しているのは、スルー諸島からサバ州南東岸にかけての地域で、ここには 40 万人強のサマ人が住む。その他の地域では、サマ人は小規模な人口で拡散している。サバ州の西海岸のコタブルド (Kota Belud) やスルー諸島北部のバシラン (Basilan) 島内陸に居住する稲作農耕民のサマ人を除くと、ほとんどのサマ人は沿岸・島嶼部に住んでいる。沿岸・島嶼部に住むサマ人は、漁業、ココヤシ栽培、商業、海上交易などを主な生業としている。

上記のような広い範囲に拡散分布していることから、サマ人の歴史や言語にかんする研究やサマ人にかんする民族誌においては、かれらの移動史が主要な研究テーマのひとつとされてきた。サマ人の移動史は、その歴史的起源をめぐる議論との関連で論じられることが多かった。

サマ人の歴史的起源についての研究は、歴史地理学と言語学において主題とされ、人類学者が臨地調査のデータをもとにそれらの研究に検討をくわえるかたちで展開した。その先駆となったのは、歴史地理学者ソーファーの『海の放浪者』 [Sopher 1977(1965)] である。ソーファーが研究の主題としたのは、船上居住者の歴史的起源を明らかにすることであったが、この業績は同時に、サマ人を含む東南アジアの船上居住者を対象とするはじめての包括的な歴史研究でもあった。

東南アジアの各地に、陸地に拠点を持たず船を生活の場とする人々が住むことは古くから知られていた。スルー諸島やスラウエシ島沿岸部に住むサマ人の一部や、マレー半島南西部沖合のオランウト (Orang Laut、「海の人」の意)¹、ビルマ南西沖のメルギー (Mergui) 諸島のモウケン (Moken) 人などである。ソーファーは、これらの船上居住者にかんする 17 世紀から 1960 年代までの植民地史料と民族誌資料を包括的に検討し、かれらのあいだには、船上居住という生活様式のほか、人口の少なさと拡散的分布、オーストラロイド系の身体的特徴、言語、優れた航海や造船の技術、単純かつ原始的な漁撈技術、アニミズム的信仰など、多くの共通点がみいだされることを指摘した [Sopher 1977 (1965): 288-294]。そして、かれらの身体的特徴、言語、アニミズム的信仰が、マレー半島南部沖合のリアウ・リング (Riau-Lingga) 諸島に住む狩猟採集民のものに類似すること、また各地のサマ人やオラン・ラウトがリアウ・リング諸島に近いジョホールを自らの起源の地とする起源神話²を持つことから、東南アジアの船上居住者はもともと単一の狩猟採集民であり、その起源はリアウ・リング諸島にあるとする仮説を提示した [Sopher 1977(1965): 352-359]。

スルー諸島へのサマ人の移動については、14 世紀から 15 世紀頃にリアウ・リング諸島またはジョホールの沖合から、ボルネオ西岸を経由してスルー諸島に至ったパターンと、ジャワ海からスラウエシ島の東岸を経由してスルー諸島に至ったパターンの二つがあったと推論

¹ オラン・ラウトは複数の言語文化集団にたいする総称である。

² サマ人のジョホール起源神話については、Sopher [1977(1965): 352-359]、Nimmo [1968: 39-42]、床呂 [1992] を参照。

した [Sopher 1977(1965): 345-386]。

このソーファアの説にたいし、パレセン [Pallesen 1985] は語彙統計学的な分析に基づいて反論をおこなっている。パレセンは、サマ語の祖語は8世紀頃までにミンダナオ島南西部のサンボアンガ周辺域で話されるようになり、その話者であるサマ人はそこから各地に分散したと結論した。そして確定はできないが、かれらの起源はインドネシアの東部にあるのではないかと推論を述べている。他に、考古学者のスポエル [Spoehr 1973] も、サマ人の陶器や鉄器具などの物質文化の比較分析により、10世紀以前にミンダナオ南西部でサマ人とミンダナオの他民族との交易関係が存在したことや、この地域からスルー諸島へのサマ人の拡散的な移動が生じたことを推測している。

文化人類学者のニンモ [Nimmo 1968; 1986] は、自身がおこなった民族誌的調査をもとに、またパレセンやスポエルの成果をふまえて、リアウ・リング諸島とスルー諸島のあいだには物質文化や言語の面での伝播の経路を確認できないこと、リアウ・リング諸島からの小規模な人口を端緒とするには、現在のスルー諸島におけるサマ人の人口が大きすぎること、社会組織や信仰の面で海サマ人と他の船上居住者は共通性を持たないことなどを指摘し、ソーファアの説を否定した。彼は、海サマ人の船上居住は生態的適応の結果であると結論している。サマ人のジョホール起源神話については、それがサマ人の歴史的想像力に訴えかける魅力的な物語であったために、かれらが（スルー諸島に拡散した後に？）従来の自分たちについての歴史の語りに付けくわえた、比較的新しい伝承であろうと述べている [Nimmo 1968: 41]³。

パレセンの言語学的分析は、海サマ人の歴史表象をめぐる人類学者の議論にも影響を与えた。タルシラ (tarsila) と呼ばれるスルー王国の王統記では、スルー諸島の先住者はタウスグ人で、その有力者が人々を統合してスルー王国の基盤を築いたとされる。他方でサマ人は、その後に移民としてスルー諸島に到来した外来者として描かれている [Saleeby 1963(1908)]。人類学者の床呂 [1992] やセイザー [Sather 1997: Chap. 1] は、パレセンの分析に基づいて、またサマ人側からの歴史表象をふまえてこの王統記を再検討し、サマ人を外来者とする歴史的記述が、タウスグ人を支配層とするスルー王国の王権秩序を正統化するために創られたタウスグ人の歴史表象であることを指摘するとともに、スルー諸島やサバ州南東岸における民族の起源をめぐる言説の政治性と歴史性を明らかにしている。

以上みたように、サマ人の歴史的起源や移動史に関する研究には一定の蓄積がある。しかし、1980年代までの研究 [Sopher 1977(1965); Nimmo 1968; Spoehr 1973; Pallesen 1985] は、サマ人の移動を周囲の具体的な政治経済状況とはあまり関係せずに、独立的に生じた現象であるかのように扱ってきた。また、それらの研究はいずれも、他民族との通婚や同化、民族の生成あるいは分化といった集団編成の流動性、可変性にはほとんど関心を向けていない。サマ人の歴史にかんする研究におけるソーファア [Sopher 1977 (1965)] の貢献、およびパレ

³ ニンモは、なぜサマ人がジョホール起源神話を魅力的と考えたのかについては記していない。東南アジアでは一般にジョホールは、正統イスラームの中心地の一つと考えられている。そのことが、サマ人が自己の出自を語るうえで魅力的だったということであろうか。

セン [Pallesen 1985] のサマ語研究における貢献は、いずれも高く評価されるべきである。しかし、ウォレン [Warren 1978; 1981] が詳細な史料分析に基づいて、18 世紀から 19 世紀までのスルー海域における民族生成のダイナミズムを明らかにしたいまでは、ソーファーらが仮定したサマ人の歴史的起源という概念自体の有効性が再考されなければならない。

くわえて、パレセンやニンモの研究にはインドネシアのサマ人にかんする一次的なデータがほとんど欠如していることも指摘しておかねばならない。サマ人はミンダナオ島南西部を起源の地とし、10 世紀以降にそこから南部へと拡散していったとするパレセンの仮説は、現在、広く認められている。しかしながら、彼の議論が依拠する言語データのうちスラウェシ周辺海域をはじめとするインドネシア地域のサマ人に関するデータは、きわめて不十分なものでしかない。サマ人の人口の 3 分の 1 を占めるインドネシア地域のサマ人の言語および文化要素についての分析を欠いたパレセンの仮説は、データの不十分さという点からも再検討される必要がある。

II. 資料の概要

上に記したように筆者は、サマ人の「真正なる」歴史起源を探ろうとする作業には、いまやあまり学問的意味はないと考えている。サマ人の移動史を論じることの意義は、そうした目的にではなく、東南アジア海域世界の生成・再編のダイナミズムをローカルレベルの現象に焦点をおいて探るといった目的のなかに見出されるであろう。この立場では、サマ人の移動史をよりマクロな地域史の文脈に連繫させ、かつそれが展開した歴史過程を地域間で比較検討しつつ考察することが重要となる。

こうした方向性を念頭におきつつ、本稿ではサマ人の移動史を全体的にかつ地域間比較の視点を取りいれて探っていくための予備的作業として、島嶼部東南アジア全体におけるサマ人の人口分布およびスラウェシ周辺海域のサマ人集落の分布に関する基礎的資料を提示する。資料の概要は次のとおりである。

資料 1 東南アジア島嶼部におけるサマ人の分布

この資料は、島嶼部東南アジア全体のサマ人の人口分布に関するものである。ここでは、フィリピンについては municipality、マレーシア・サバ州については daerah/district、インドネシアについては propinsi/province を単位として、それぞれの人口の数値を記すと同時に、その位置を地図上に示している。島嶼部東南アジア全体のサマ人の人口に関する明確な情報はこれまで存在せず、この資料においてはじめて明らかにされたことを付記しておく。

資料 2 サマ人の下位集団分類

この資料は、筆者が名古屋市立大学の赤嶺淳とともに 1995 年以来おこなってきたサマ人の基礎語彙、物質文化、移動交流圏、歴史認識（起源神話を含む）等に関する広域臨地調査にもとづいて作成したものである（本報告書末尾の Akamine and Nagatsu 論文を参照）。

資料3 スラウェシ周辺海域における主なサマ人集落の分布

この資料は、スラウェシ周辺海域に焦点をおいたサマ人の分布に関する詳細な地図情報である。ここでは、いくつかの地理的範囲におけるサマ人の人口が 50 人以上の村 (desa) すべてを地図上に示し、それぞれのサマ人の人口の数値を表に記している。

マレーシア・サバ州にかんしては、民族帰属別の人口データは、20 世紀前半以来、約 10 年おきのセンサスに記載され続けている。2000 年のセンサスにも記載されている。しかしフィリピンとインドネシアに関しては、信用しうる民族帰属別の人口データは、それぞれの 2000 年のセンサスにおいてはじめて記載された。以上の資料のうち資料 1 と資料 3 は、そうした各国の 2000 年人口センサスに基づき、筆者がまとめたものである。データの出典は以下に示すとおりである。

フィリピン

National Statistics Office, Republic of the Philippines. 2002. *Census 2000, Population and Housing Characteristics*. (CD-ROM). Manila: National Statistics Office, Republic of the Philippines (各州版)

マレーシア

Department of Statistics, Malaysia. 2001. *Population and Housing Census of Malaysia, 2000: Population Distribution by Local Authority Area and Mukims*. Kuala Lumpur: Department of Statistics, Malaysia.

インドネシア

インドネシア中央統計局 Badan Pusat Statistik, Republik Indonesia (Jl. Dr. Sutomo 6-8, Jakarta) における筆者の調査 (2005 年) による。

参考文献

- 床呂郁哉. 1992. 「海のエスノヒストリー——スールー諸島における歴史とエスニシティ」『民族学研究』57(1): 1-20.
- Asher, R. E. and Christopher Moseley, eds. 1993. *Atlas of the World's Languages*. London: Routledge. (『世界民族言語地図』福井正子訳. 東京: 東洋書林. 2000.)
- Grimes, Barbara F., ed. 2000. *Ethnologue: Languages of the World's*. (14th edition) Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Nimmo, H. Arlo. 1968. Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16(4): 32-59. ———. 1986. Recent Population Movements in the Sulu Archipelago: Implications to Sama Culture History. *Archipel* 32: 25-38.
- Pallesen, A. Kemp. 1985. *Culture Contact and Language Convergence*. Manila: Linguistic Society of the Philippines.
- Saleeby, Najeeb M. 1963(1908). *The History of Sulu*. Manila: Filipiniana Book Guild. (reprint of the 1908 edition)
- Sather, Clifford. 1997. *The Bajau Laut: Adaptation, History, and Fate in a Maritime Fishing*

- Society of South-eastern Sabah*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Sopher, David E. 1977 (1965). *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum of Singapore. (reprinted in 1977 with postscript)
- Spoehr Alexander. 1973. *Zamboanga and Sulu: An Archaeological Approach to Ethnic Diversity*. Ethnology Monographs No. 1. Pittsburgh: Department of Anthropology, University of Pittsburgh.
- Warren, James F. 1971. *The North Borneo Chartered Company's Administration of the Bajau, 1878-1909: The Pacification of Maritime, Nomadic People*. Papers in International Studies, Southeast Asia Series No. 22. Athens: Ohio University, Center for International Studies, Southeast Asian Program.
- Warren, James F. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.